

ぞくぞく
続々

ちめい とうさくみんわ
地名からたどる創作民話



豆辞典シリーズ 7
作絵：やまおか みつはる

目 次

1. ヘボ仙人：長崎県
(ヘボせんになん)
2. 「かしこさ」を手に入れた力丸：滋賀県
(「かしこさ」をてにいらた りきまる)
3. 鬼の舌震：島根県
(おにのしたふるい)
4. 小鳥原の美声人：広島県
(ひととばらの びせいじん)
5. “とよ”バアの青い目をみると：富山県
(“とよ”ばあの あおいめをみると)
6. 願掛け大岩：兵庫県
(がんかけおおいわ)
7. 二人の“ほつみ”：静岡県
(ふたりの “ほつみ”)
8. いたずら河童のおかげです：広島県
(いたずらかっぱの おかげです)
9. 美味しい鍵穴：静岡県

(おいしいかぎあな)

10. 国で二番の滝がいい：福井県
(くにでにばんのたきがいい)

ここに掲載した地形図は、国土地理院発行のものを
使用しました。

1. ヘボ仙人

(ヘボせんになん)

長崎県南松浦郡新上五島町若松郷 銅切
崎・ヘボ島



九州（きゅうしゅう）の西に、仙人（せん
にん）がすむ島があったんだと。

仙人といえば、それはそれはながい間、お
く山やはなれ島で、きびしいしゅぎょうをし
てな、どんなこんなにも、がまんできるん
だそうな。

この島にすみついた仙人もな、どこかの
はなれ島でしゅぎょうをつんできて、いまでは
村人をしあわせにすることを仕事としていた
んだと。

ところが、あたたかなこの土地では、人び
とが、なにふじゆうなく、くらしているも
んで、仙人はしごともなく、しゅぎょうもせず
に、ひまをもてあましていたんだな。

ある日、どうくつの中で、いつものように
ひるねをしていると。これもまた、どうくつ

2

の住人（じゅうにん）であるネズミが、えさ
をはこんで、うろちょろしていたんだと。

きげんがわるかったのだろうかの、ひるね
をじゃまされた仙人は、「うるさーい」とどな
ったんだと。

「そんなこといわないでください。ここはあ
なただけのすまいではなく、私たちねずみや、
てんじょうにいるコーモリさんのすみかでも
あるんですから」

「ほんとうに、仙人なのかな。このじいさま
は？」

一ぴきのネズミが、小さな声で、いったの
が聞こえたようだったと。

「なんだと、わしがにせもの仙人だというの
か」

しわだらけの顔をまっかにして、ネズミた
ちの上に、もっていた”つえ”をふり下ろそ

うとした。

「待ってください」

一ぴきの若いネズミがとめたんだ。

「あなたが、仙人であることは、うたがいの
ないことです。で、ひとつお願いがあります。
私たちは、この山おくにすむ大山猫（おおや
まねこ）におどされて、こまっています。

まい日のように、なかまがつかまっていま
す。なんとかしていただけませんか」
と、思い切ったのでみたんだと。

「うーん、いたずらする大山猫だといっても、
しあわせをあたえるのが仕事の私に、猫をこ
ろすことはできない」

と、仙人はいったと。

若いネズミは、かまわずにいった。

「仙人さまには、かんたんなことだと思いま

3

す。里に下りてこないように、大山猫をおどかすだけでもけっこうです。お願いします」

「そうか、おどろかすのだな。わたしのつえで、大山猫のしっぽを切り落とすなどして、こらしめてあげよう」

「さすが仙人（せんにな）さまだ」と、ネズミたちはおだてたんだと。
「かんたんなことさ」
仙人はやくそくした。

でも、ふだんのひるねのようすを見ていたネズミたちは、それほどきたいしていなかった。

それからいく日かして、仙人は海への岩山で大山猫を見つけた。すばやく、つえをふりかざし、ねらいをさだめてふり下ろしたんだ。

4

その後、ネズミたちは大山猫（おおやまねこ）に食べられてしまったのだろうか。この島にはネズミが少ないのだと。

仙人が、ばか力をふり下ろしたみさきは、銅切崎（ずんぎりざき）とよばれてな。切り落とされた岩も、おきにのこっていて、それはヘボ（仙人）島とよばれているそう。

そう、そののち仙人はな、しばらくの間、このヘボ（仙人）島にすんでいての、しゅぎょうのかたわらで、そうなんしかけた船や漁師（りょうし）を助けていたんだと。

しゅぎょうした仙人の力が今ものこっているのだろうか。あらしのときに、この島かげに入るとふしぎと風はやみ、助かることが多いといいつたえられているんだそう。

5

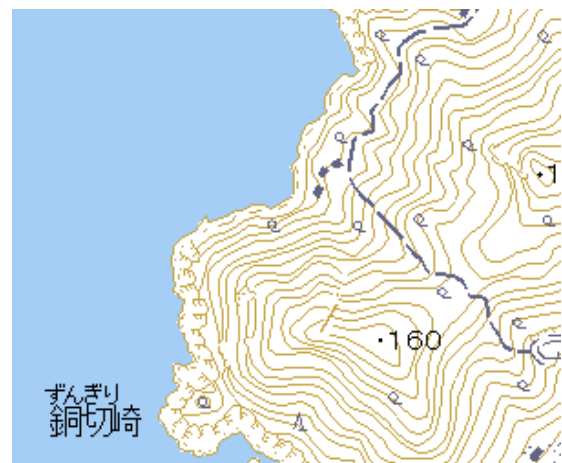
ところが、大山猫のしっぽどころか、毛の一本にもさわることなく、にげられてしまったんだと。

それどころか、ばか力で大山猫を切ろうとして、岩山を切ってしまった。そして、大切なつえさえもおってしまい、あげくのはてに海へ落ちて、ぬれネズミ？になってしまったんだと。

ふだんのしゅぎょうがたりなくて、ただの人になっていたんだな。

つえももたない、水でよごれた、ただのひげじいさんになってしまった仙人は、とてもネズミ会わず顔はない。

ネズミとのやくそく以上に、力のなさにすっかりじしんをなくした仙人は、どうくつをすて、島をすて、どこかにしゅぎょうのやり直しに出かけたんだそう。



長崎県南松浦郡新上五島町若松郷 銅切崎（ずんぎりざき）

1/25,000 地形図長崎 16 号の 3・4「佐尾」



長崎県南松浦郡新上五島町若松郷 ヘボ島
1/25,000 地形図長崎 16 号の 3・4「佐尾」

2. 「かしこさ」を手に入れた力丸

(かしこさをてにいれた りきまる)

滋賀県長浜市(旧浅井町) 力丸・七廻り峠



6

「力丸(りきまる)」は、名前のように力持ちだった。

そして、村の西のはしには、村一番のかしこい子どもがおってな、名前を“俊”(とし)といって、それはかしこい子であったんだと。

本をよく読み、大人顔まけの文字を書いた。力丸には、この俊の「かしこさ」がほしかったそう。

ある日のこと力丸は、俊にお願いしたんだと。おまえの「かしこさ」をかしてくれないかの。

「おれは、そのかわり、お前にかわって、力をかすから」と。

「うーん」と考えた俊は、力丸にこういった。「それではな、この前の大雨でとなりの村へつうじる道のあちこちに、大きな岩が落ちていて、村人は大へんこまっている。あの大

石をかたづけて、よい道にしてくれないだろうか」

「おやすいこと」

力丸は、峠道(とうげみち)までいくと、道をふさぐ大石をくだいては沢に投げ、かたづけ始めたんだと。

夜、里へ帰ってきた、力丸は、さっそく俊にいった。

「それでは、こんどはおれの番だ、かしこさを、少しかしてくれ」

「わかった、かしてあげよう」

「それではな、おれは本を読みたいのだ。なんとかしてくれ」

「わかったよ。それでは、私が本を読むから、いっしょに声を出してみな」

俊が本を読むと力丸も同じように声を上げた。一さつの本が読み終わった。

7

「今度は、文字を書きたいな」
「それでは、私が書く文字を見て、まねをしてここに書くといい」
俊（しゅん）はいった。
力丸は、俊が書くとおりに、書き始めた。
なんまいかの書（しょ）ができ上がった。

「なんかへんだな一」
「へんなことはないよ、力丸は書も読んだし、文字も書けた。それは、私が『かしこさ』をかしたからだよ」
俊いった。
「そうかな一、なんかへんだな一。こんどは、俊が読まなくても、自分で書が読めるように、もっと『かしこさ』をかしてくれ」
すこしへんだとは思いながらも、力丸は、
こうたのんだそうな。

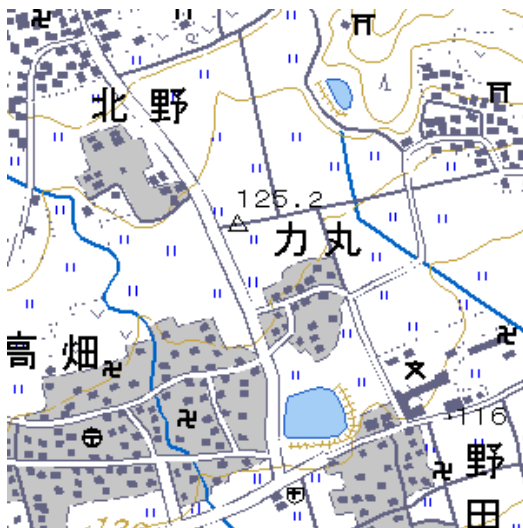
それからというもの、力丸は、昼間は、力をだして道を作り、夜は俊の「かしこさ」をかりたんだ。

そして、ひと月がたち、半年がたつと。
峠道（とうげみち）は、となり村へ通じるりっぱな道になった。そして、力丸は力持ちで、しかもかしこい少年になったんだ。

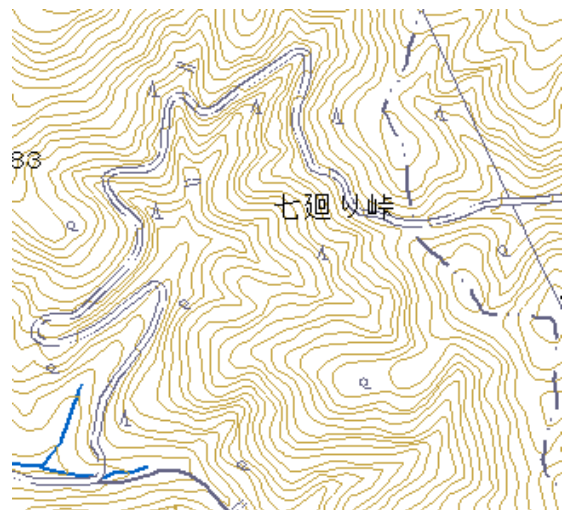
俊はというと、あいかわらず「かしこさ」だけの、ひよろひよろとした少年であつたと。

その力丸が作った峠道が、この村の東にある七廻り峠（ななまわりとうげ）への道であつてな。力丸の血すじを引くものがすむ村は、いまでは「力丸」とよばれているのは、この地方ではよく知られたことだと。

8



滋賀県長浜市（旧浅井町）力丸（りきまる）
1/25,000 地形図岐阜 12 号の 3「虎御前山」



滋賀県長浜市（旧浅井町）七廻り峠
1/25,000 地形図岐阜 12 号の 3「虎御前山」

9

3. 鬼の舌震（したぶるい）

（おにのしたぶるい）

島根県仁多郡奥出雲町（旧仁多町） 鬼の
舌震・美女原



10

れぞれが、ひとりづつむすめをかかえて山につれて行こうと相談したんだ。

夜がふけると、三びきの鬼は、静かに家にしのびこもうとした。ところが、家へ入ったとたん、大きななべや、かまをけとばしてしまった。

「どーん、ガラングラン」

「しまった」

と、いったときには、もうおそかった。三人むすめたちは、ねどこからぬけ出して、部屋のおくにかたまってふるえていた。

それだけではない、その前には、大きな“おの”をもったじじさまと、“やっこ（むかしの、大きなくぎぬき）”を持ったばばさまが、鬼にも負けぬ顔だちで、立ちふさがっていたんだ。

むかし、むかしのことだった。

石見（いわみ）の山おくに美女（びじょ）のすむという里があったんだと。

それを聞いた、さらにおく山にすむ鬼たちは、

なんとか、この里の美しいむすめを嫁（よめ）にほしいものだと思っていたそうなの。

ある日、三びき、いや三人かな？ともかく鬼たちは、美女がすむという村、美女原（びじょだいら）へやってきた。

村の入り口までくると、川でせんたくをする娘のにぎやかな声が聞こえてきた。

林のかげから、三人のむすめたちを見た鬼たちは、いっそう嫁っ子（よめっこ）にしたいと思うようになったんだと。

せんたくをおわって、家へもどるむすめたちを見とどけた鬼たちは、夜になったら、そ

「なにをしにきただ。むすめに手を出したらどうなるか」

「すごいばばさまだな、鬼よりおそろしい顔をして」

鬼たちは、顔を見合わせていったんだと。

「わるさをする気はない。美しいむすめたちを、嫁（よめ）にももらいたいと思ってきただ」鬼たちはいった。

「嫁に？だと、じょうだんじゃない」

ばばさまはいった。

「心も知れない鬼などに、かわいいむすめを嫁（よめ）にやれるもんか」

「そんなことをいわないでけれ、おれたちはあばれ者ではない」

「顔はわるいが、心は美しいだ」

「生まれてこの方、うそなどついたことない」

11

三びきの鬼たちは、口ぐちにいったんだと。

少し落ちついた、ばばさまは、「フー」といきをつくつと、こういった。

「心やさしくだと、うそなどついたことはないだと、信じられないのー」

「そんなことはない」

「うそはつきません」

鬼たちは、また口ぐちにいったと。

「ほんとうだろうね、うそをつかない心やさしい鬼だったら嫁にやろうぞ。しかし、うそつきだったら、このおのでたたき、やっところで、舌（した）をぬこうぞ」
じじさまがいい、ばばさまがうなずいた。

「うそつきではない、あばれものでない、しょうこを見せてもらうじゃないか」

12

「うそをいいなさんな、先ほどはなんといった、わしの顔をみて、『鬼よりこわい』といったのはだれだ」

ばばさまは、おそろしい顔でさらにいった。
「鬼など、信じられない、大うそつきだ」とね。

「しまった、引っかけた」と思ったときは、おそかった。

ばばさまは、しばりつけた三びきの鬼の前に、大きなやっところをもちだした。

「舌（した）を出せー、ぬいてやるー」

ばばさまの大声に、三びきが三びき？、おそろおそろ、舌をだした。

「ばばさまは、本気だー」

鬼たちの舌がふるえて、そのいきおいのすごさといったら、山がふるえるほどだったんだと。

といいながら、ばばさまは、おとなしいしょうこにといって、三びきを柱にしばりつけたんだと。

そして、ばばさまが、鬼たちにいったそう

な。
「うそはいけないよ、ほんとうのことをいいな。むすめたちは美人とおもうかね」

「はい」

「はい」

「はい」

鬼たちは、それぞれ答えた。

「それでは、むすめたちのばばさまは、わしはどうかね」ばばさまが聞いた。

「ば、ばばさまもー？、むすめにたがわず美しいだ」

しぶしぶと鬼たちは、答えたと。

ふるえのとまらない鬼たちは、力を合わせ、しばられたはしらを引きちぎって、ほうほうのていで、山へにげ帰ったのだと。

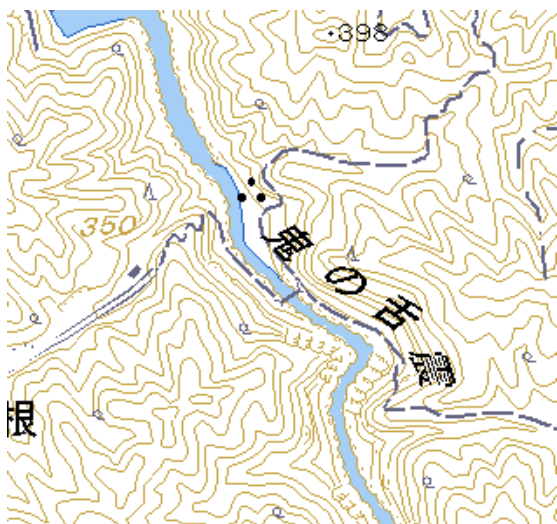
それっきり、鬼は里へ顔を出さなくなったそう

な。
それから、この地方では「うそをつくと閻魔（えんま）さまに舌をぬかれる」ではなくて、「うそをつくと、ばばさまに舌をぬかれる」といわれているのだと。

また、そのときのふるえが、どのくらいすごかったかは、この村のはずれにある「鬼の舌震（おにのしたふるい）」というところをたずねると、よくわかるそう

な。
もちろん、今も美人がすむ美女原も近くにあるとよ。たずねてみなされ。

13



島根県仁多郡奥出雲町（旧仁多町） 鬼の舌
震（おにのしたぶるい）
1/25,000 地形図高梁 14 号の 4「横田」



島根県仁多郡奥出雲町（旧仁多町）美女原（び
じょはら）
1/25,000 地形図高梁 14 号の 4「横田」

14

4. 小鳥原の美声人

（ひととばらのびせいじん）

広島県庄原市西城町小鳥原・八鳥



備後（びんご）の山の中に、それは、それは美しい鳥がいるという、うわさがあつたと。体は、にわとりほどの大きさと、色は七色であつてな、声は、うぐいすの八倍も美しい声で、なくのだと。

鳥の名前は、「八鳥（はっとり）」といった。その村の殿（との）さまは、どうしてもこの鳥をつかまえて、ひと目見たいものだと思ったそう。

二人の若ものがえらばれ、八鳥をつかまえることが、めいれいされた。

そして、若者たちは、山に入ったんだ。

なん日もさがし歩いたある日、美しい声が聞こえてきた。うわさどおりのなんともいえない美しい声、たしかにうぐいすよりもなんばいも美しい声だった。

しかし、すがたは見えなかった。

15

なんとかしてつかまえよう、この目で見ようとして、二人は声の方向に近づいたと。

「ばさ、ばさー」

いっしゅん見えたすがたは、しっぽをみじかくした、くじゃくのようなであった。

しかし、空をまう八鳥（はっとり）をつかまえることは、よいではなかった。

若ものたちをわらうように、八鳥は、ふたび空をまい、やまねこ山の方がくに飛んでいった。

そこで二人の若ものは考えた。

ねぐらを見つけ、ね静まったころを、おそえばよいと。

二人は、夕方になると声をひそめて、やまねこ山のすそを目ざした。そこで、八鳥がもどるのを待つと、かすかに聞こえた鳴き声をたよりに巣（す）を見つけた。

16

巣は、小さなどうくつのかべにあったんだと。

若ものは、夜を待って、あみを手に、しのび足で巣へと向かった。

そして、静かに進みあみを大きくふって、「鳥をつかまえたー」と思ったときだった。

「ど、どーん」

さいわい、けがは少なかったが、二人は、どうくつのおくそこに落ちてしまったのだ。

それでも、八鳥は、あみの中にいた。

「このどうくつから、どのようにしてはい上がろうかの」

「入り口の光ははるか遠くに見えるし、鳥のように、まっすぐには上れないし」

右へ、左へどうくつは続くが、そこはめいろのようで、とても出られそうもない。

二人は、すっかりとほうにくれてしまった。

その時であった。

「どうくつの出口まで案内してあげますから、私をたすけてくださいませんか」

八鳥の小さな声がしたそうな。

「このままでは、しんでしまう」

二人は、八鳥のたすけをかりることにしたんだと。

「といっても、手ぶらで帰っては、殿さまのおしかりが怖い」

「どうしたものかの・・・」

「いい考えがあります」

「・・・・・・」

八鳥がなにかいいました。

「うーん、そうするしかないな」

やくそくができて、八鳥につれられてどうくつをでた二人は、八鳥をかごに入れて、殿さまの前に進んだ。

「おおー、見ごとな、色あいだの一」

「だが、うぐいすの八倍も美しいという声が、さっぱり聞こえぬな」殿がいった。

「それはですね、私たちもこの鳥をつかまえてから、ためしてみたのですが、かごの中ではいっこうになきませんが、手のひらにのせると、みごとな声でなきます」

「そうか、ではわしの手の上に」

といって、殿（との）が八鳥をかごから出し、手のひらに出した時、美しい声が聞こえた。

と、思ったしゅんかん八鳥は大空に向かって飛び出したと。

剣（けん）に、じしんのある殿さまはな、

17

鳥がにげたと思ったとどうじに、かたなをぬいた。

日の光を受けて、美しい羽がたくさん空からふってきた。しかし、羽を落とした八鳥のすがたは空には見えない。かといって、地面にも、鳥のしがいはない。

「ぶじに帰っただろうか」

「大丈夫だろう」

二人の若者は、「これで、八鳥とのやくそくをはたしたね」と、小さくいったそうな。

「おいしいことをしたの一」

なにも知らない殿さまは、そういっただけで、二人の若者をしかることはなかったんだと。

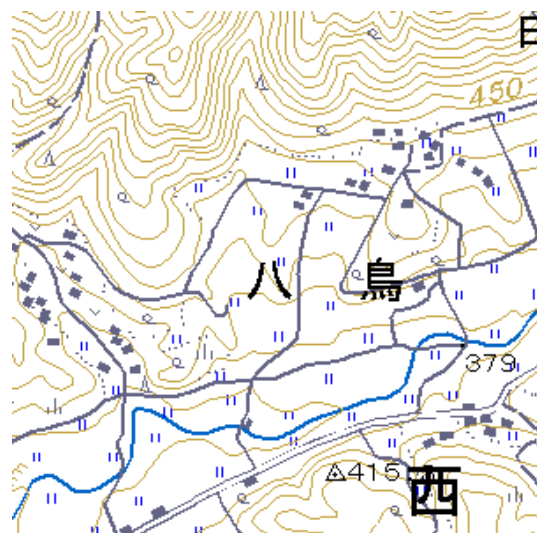
美しい鳥がすんでいた山里は、今八鳥とよばれ、八鳥の羽が、ぱらぱらとふった先には、

小さなほこらが立っているんだと。そして、このあたりは小鳥原（ひととばら）とよばれているそうな。

この村人は、美しい声の持ち主。いや「八鳥」をおいにかけていたときの若者のように、小さな声でつぶやくように、じょうひんに話すのだと。



広島県庄原市西城町小鳥原（ひととばら）
1/25,000 地形図高梁 13 号の 2「道後山」



広島県庄原市西城町八鳥（はっとり）
1/25,000 地形図高梁 13 号の 2「道後山」

5. “とよバア”の青い目をみるとな

(“とよ”ばあの あおいめをみるとな)

富山県南砺市(旧城端町) 理休 人喰谷



冬は雪深い、この村の小さなお寺に「理休(りきゅう)」という、お坊(ぼう)さんがいての。理休は、京でしゅぎょうをつんで、こ

20

村人もめっきり少なくなった。

これまで、京ですごしてきた理休には、とてもたいくつな、まい日がやってきた。

朝と夜には、本堂でおきょうをとえ、そのあいまには、おきょうをすこしうつして。それでも、やっぱりたいくつだった。

たいくつが続くうち、理休はいつもの本堂でのおつとめも、おきょうをうつすことも、おっくうになってきた。まい日、コタツで丸くなってすごすことが多くなっていた。

そんな、雪がふり続くある日の夕方、いつものようにコタツでうたたねをしていると、「どん、どん」と門戸をたたく音がしての。

門の前には、ひとりのおばあが立っていたんだと。戸を開けると、おばあは、こういったんだ。

21

の春に、越中(えっちゅう)にやってきたそうなの。

理休にとって、この地での生活はかいてきだった。

となりきんじょの農家の人びとはしんせつで、おまいりにくるたびに、しんせんな野菜や米などをおいていく。

この夏の仕事はというと、おとしよりのおそうしきが、すこしあっただけで、たいくつなほどだった。

月に一度の集まりには、村のものにちよつとありがたい話をしな。

それはそれは、ゆったーりとした気持ちでまいにちをすごしたんだと。

そして、秋になり、冬になり、雪深い村の小さな寺には、たずねる人も、おまいりする

「じいさまのはかのある、おくの村さ行こうと思つての、海べの町からでてきたんだが、雪が深くても行けそうもない。それで、雪がやむまでここへとめてもらおうとして、戸をたたいたが」

「それは、おこまりじゃな一。少し寒いが、本堂(ほんどう)は広いで、いつまででもとまっていかれ」

と理休はいつて、おばあを寺にとめたんだ。

話を聞くと、おばあは、名を”とよ”といつてずいぶん前に、じいさまとひとりむすこ子をなくしたんだと。

雪は、それからなん日もふり続き、理休はそんな身(み)の上話を、なん度も聞くことになったんだと。

ところが、ふしぎなことに“とよバア”の

身の上話をじっと聞いているとねむくなる。そしてよく朝には、体がひえ切って目がさめる。ふとみると、“とよバア”が横にねていたんだな。

「なんだ“とよバア”、本堂でねなかったか」「んだ、本堂は寒いし、さびしいんだ」

雪のふり続くうち、そんなことをくりかえしていると、理休はいちだんとなまけ者になってな、おつとめどころか、本堂の掃除もしなくなったそうなの。

そして、ようやく雪がやんだ日、“とよバア”は、みじたくをしてな、こういったんだ。

「お坊（ぼう）さん。雪もやんだでな、おくの村さ向かおうと思う。そこで、たのみがあるんだがの」

「たのみとは、なんかの」

気のない声で、理休（りきゅう）はいった。

22

理休はというとな、ひるねでばかりでおとろえた足は重くなりながらも、“とよバア”の青い目と手まねきにさそわれるように、ふらふらとして、まがりくねった峠道から深い谷のほうにすいこまれそうになった。

そこは、おっそろしい急しゃめんのつづく谷だった。

その時だ！

目の前を大きなウサギが走ったんだと。

うんよく、その大きなウサギの赤い丸い目と、理休の目が合った。

理休は、「はっと」目がさめたようだった。「われは、なんをしていたんだらう」

気がついた理休は、“とよバア”の、おいでおいでは答えしないで、フラフラ足のまま峠道を下りて、寺へかけこんだんだと。

「雪も多いし、しばらく歩いていないので、不安でな。峠（とうげ）まで送ってくれねーかの」と、“とよバア”がいった。

“とよバア”の青い目をみていると、なぜか、「うーん。では、峠まで送ってやるか」と、返事してしまったんだと。

そういえば、身の上話を聞いているときも、「“とよバア”のあの青い目を見ていると、引き込まれるようにねむくなったなー」と、思っでは見たが、理休には、どうにもこたえなかったんだと。

“とよバア”と理休は、みじたくをして雪深い道を、おくの村さへ向かったと。

ところが、峠が近くなると“とよバア”は急に早足になってな、とっとと先へ行って、峠のほうに立つと、おいでおいでと、手をふっているように見えた。

寺へ帰ってから、村のものにこれまでの話をするとな。

「なーんだ、お坊さんはしらなかったがかいね、村のものは、みんな知ってるだが」といって、こういったんだ。

「その“とよバア”はなあ、この峠道にすむ“雪山姥（ゆきやまんば）”といっとなあ、なまけ者を見つけては雪山へさそうんだ」

「まさかのー、都からきた、えらーいお坊さんがなまけ者だなんて、だれも思わないがに、そいで、だーれも話さなかったんだちゃ」

雪深いこの村の人々は、冬でも女は縄（なわ）をない、男は木で細工（さいく）のものを作るなど、仕事にせいを出してすごすはたらき者ばかりだったんだと。

理休は、その後どうなったかって。

23

さーての、相変わらずなまけものしていて、
いつの間にやら村からいなくなったそうなの。
ウサギもあきれて、たすけてあげなかった
というから、谷に落ちなのかなのー？

そしていまでは、寺のあったあたりは、な
まけものをいましめるために理休(りきゅう)
とよばれての、峠の谷は「人喰谷(ひとくい
だに)」とよばれているそうなの。

「大雪の後には、雪山姥(ゆきやまんば)“の
とよバア”が、峠のあたりで青い目を光らせ
て、手まねきするから気をつけろ」といわれ
ているんだと。

特に、なまけ者にはね！



富山県南砺市(旧城端町)理休(りきゅう)
1/25,000 地形図金沢1号の2「城端」



富山県南砺市(旧城端町) 人喰谷(ひと
くいだに)

1/25,000 地形図金沢2号の1「下梨」

6. 願掛け大岩

(がんかけおおいわ)

兵庫県宍粟市千種町、波賀町境カンカケ越



ある村で、木地（きじ：もっこうさいく）をする常（つね）さんは、仕事で知り合った、東の村の由（よし）じいさんから、
「峠の大岩に願（がん）をかけるとな、なんでもかなえてくれるらしいぞ」
ということを知ってきたんだと。

「きのうは、いいことを聞いたあ」
常さんは、さっそく、おそなえをもって、その大岩さ、願をかけにいったんだと。
「早く、嫁っ子（よめっこ）がくるように」とね。
そしたら、なん日もしないで、近所のおばさまが、常さんにと、北の村からよめごとをつれてきたんだと。

嫁の名は“おふさ”といってな、とてもい

26

「大岩さんのごりやくは、たいしたもんだなー」と、二人はかんしんしたんだ。

ここまでは、大岩の神さまも、ぼちぼち仕事せばよかった？
ところが、三日もしないうちに、峠の大岩の前は、おそなえ物でいっぱいになった。

おしゃべりのおふさは、おなかがふくらみ始めたその日のうちに、このことを八人にしゃべったの。

おしゃべりおふさから聞いたその八人は、次の日に八人に話したの、そして、三日目にはそのまた八人が、新しい八人に話したの。

さーて、なん人が知ることになったかな。八かける八は、そのまた八かけると？？？。

ともかく、村じゅうの人たちが知ることになり、それぞれがかってなおねがいごとをし

い人だった。

けってんがあるとすれば、しゃべりだしたらとまらない、「いっちゃなんない」といってもすぐしゃべる、おしゃべりだあ。

よめごがきて、ともかくうれしい常さんは、おふささんが、ここさくるまでのことを話したんだと。

「大岩さ願かけるとな、一日もしないうちにそれをかなえてくれたんだー」とな。

それを聞いたおふさもさっそく、峠の大岩に向かったんだと、おそなえ持って。

なにをたのんだかって、もちろん「じょうぶな赤子（あかご）が、さずかるように」ってな。

そしたら、それからふた月もしないうちに、おふさのおなかは、ふくらんできたんだと。

たんだと。

さあ大へん、大岩さんのおかげで、ねがいごとをかなえるために、はたらいっている神さま？は、どんなに走りまわっても、むりになったんだろうなー。

「もう、やーめた」といったかもしれねな。

ともかく、ねがいがぜんぶかなうことはなくなっただの。うんのいいほんの少しの人のねがいだけが、かなうことになってしまったんだと。

峠の大岩には、ねがいがかなった少しの人だけが、感謝の気持ちで、おそなえを持ってたずねるようになったんだと。

こうなると、峠の大岩は、ただの大きな石ころ。

27

生まれた赤子を手にした常（つね）さん、ちょっと思いました。

「そういえば、由（よし）じっちゃん、あの時いったなー、ご利益（りやく）うすれるから、このことはあんまりみんなに話しちゃなんねぞー」と。

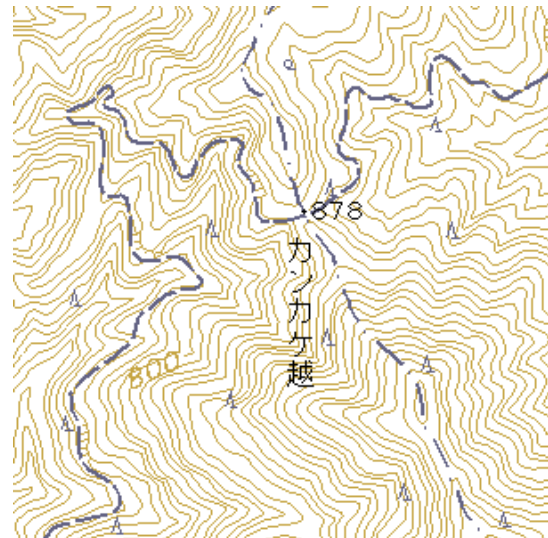
すっかりわすれていた、じっちゃんのことを思い出して、常（つね）さんとおふさんは、大わらいしたんだと。

その峠の道はの、初めのころこそ、「願掛け越え（がんかけこえ）」とよばれていたんだがの、しだいに「カンカケ越え」とよばれるようになったそうなの。

どうしてかだっけ？

そさな、大岩にお願いしても、かんがあたるほどにしか、願いがかなわなくなったってことかな。

28



兵庫県宍粟市千種町、波賀町境カンカケ越
1/25,000 地形図姫路9号の2「西河内」

7. 二人の“ほつみ”

（ふたりの“ほつみ”）

静岡県賀茂郡西伊豆町柵宜畑



伊豆（いづ）の山おくに、長いれきしを持つ神社があったんだと。

ある春の朝のこと、神主（かんぬし）さん

が、けいだいのにわそうじをしていると。大きな“ぎんなん”の木のかげに、かなしそうな顔をした男の子が立っていたんだと。

神主さんが、声をかけると、その子は小さな声でこういったんだと。

「おらー、おなかがへってしにそうだ」

「はやりやまいで、おとうも、おかあもしんでしまって。しばらくは、海べの家でひとりで、くらしていたんだけど、ついに食べ物なくなって、家を出たんだ・・・」

神主さんはな、さっそくその子に、おなかいっぱいごはんを食べさせたんだ。

そして、子どものいなかった神主さんの夫婦（ふうふ）は、これからもせめて食べ物にこらないようにと、子どもに新しく“ほつみ（穂積）”と名づけて、そだてることにしたん

29

だと。

ひと月もすると、ほつみは、ぽっちゃりと太って、元気になったんだと。ところがな、神主さんところへきて、ふた月になろうとしたある日、とつぜんいなくなったんだ。

神主さんの夫婦は、そこらじゅうをさがしたんだが、見つけることはできなかった。

「せっかくの子宝（こだから）だったのに、風のようにきて、風のようにどこかへ行ってしまったなー」といって、ざんねんがったんだと。

それから、ふた月ほどもしたころだった。

秋も深まって、いつものように神主さんが、ぎんなんの木の下で、草や葉をかき集めているとな、とりいのかげに、やせ細ったほつみが立っていたんだと。

30

冬がすぐそこまできたある日、神主さんはいつものようにぎんなんの、かれ葉を掃除していると、神社のかげの草むらに小さなどうくつの入り口を見つけたんだと。そして、その中に光るものが見えたそう。

近づいてみると、穴の向こうから歩いてくるのはほつみではないか。

よごれた体を洗い、食事をすませると、神主さんは、こんどこそしっかりとといつめたんだ。

ほつみは、こういったんだと。

「ある日、神社のうらで遊んでいて、この入り口を見つけたんだ。まっくらな、あなを入れていくと向こうがわに出ての、そこには海が見える村があつての。あなの出口には、小さなお百姓（ひやくしょう）さんの家があつて、そこのおじさんとおばさんに声をかけら

「ほつみ”ではないか、どうしたんだ」

「・・・」

「どこへいっていたんだ」

「・・・」

なにを聞いても、これまでのことは言わなかった。

神主（かんぬし）さん夫婦（ふうふ）は、ともかくよごれきったほつみをふろに入れ、ごはんを食べさせたんだ。

しかし、数か月もしてすっかりもとのように丸まるしてきたら、ほつみは、またいなくなったんだと。

神主さん夫婦も、たびたびのことでもあるし、二人には分からない、いやなことでもあるのだらうと、すっかりあきらめていたんだそう。

れたんだ。

『どこからきたんだね？、休んでいきなさい』ってね。」

つづけて、ほつみがいった。

「穴からきたといっても、しんじてもらえそうもなかったから、神主さんに最初にあつたときのように、『おとうも、おかあも、はやりやまいで、死んでしまって・・・』と話したの」

「びんぼうなお百姓さん夫婦は、『それにしては、よく太っているの』と、うたぐったけれど、ぼくを大切にしてくれて、かわいがってくれたんだ。

話を聞くと、やっぱり、その二人にも子どもがいなかったことがわかって、帰りそびれてしまったの」

31

「そうか、そうだったのか」

ほつみから、この話を聞いた神主さんは、さっそく穴をくぐり、海の見える村のお百姓さんの家に向かんだと。

そこには、たしかに小さな畑しか持たない、まずしい夫婦がすんでいた。

神主さんは、これまでのことを夫婦に話して、二人には、あなの向こうの畑を、少しかすことにしたんだと。それからというもの、お百姓さんは、あなの道をとおってな、神主さんの畑をたがやすことになったそう。

ほつみはというと、それからも山の神主さんの家と、海のお百姓さんの家を行ききしてすごしたんだと。

神主さんの畑があったあたりは、今では「祢宜畑（ねぎのはた）」とよばれているそう。

* 祢宜（ねぎ）：神主さんの下に位置する神職のこと



静岡県賀茂郡西伊豆町祢宜畑（ねぎのはた）
1/25,000 地形図静岡 4 号の 3・8 号の 1「仁科」

32

8. いたずら河童のおかげです

（いたずらかっぱの おかげです）

広島県三次市布野町横谷捨金・布野町上布野二井殿二井殿



ある小さな沼に河童（かっぱ）がすんでいた。

その河童は、いたずらずきだった。とおり

かかる人を見つけては、小えだを投げつけては、つまずかせて川へ落とすというやうないたずらをしていたんだそう。

ところが、あるときから、人をばかすやうなこともできるようになったんだと。

そんな、ある日池のほとりを旅人（たびびと）がとおった。

河童は、さっそくおぼえたての、そのいたずらをためしてみることにした。

お金に見せた木の葉を、旅人の足もとにまいたんだ。

そうとは知らない旅人は、道ばたにお金落ちていたことにふしぎに思いながらも、あたりを見わたしながら、そっと、むねにしまったんだ。

ひょんなことで、お金を手に入れた旅人は、

33

気持ちが大きくなり、村の中ほどにあったお店で、食べ物やら着物やらたくさんの買い物をした。

そして、お金をはらおうと手を入れたふところから出てきたのは、黄色になった葉っぱばかり。

旅人はいろいろとせつめいしたんだが、しんじてもらえず、店のあるじや使用人にふくろだたきになりそうになって、にげ出したんだと。

「はたらかないで、手に入れたお金なんかに、ろくなことはない」と旅人は思ったそうな。

そんなことを考えながら、山道を進んでいくと、道ばたで、ばあさまが体を丸めて苦しそうにしていた。

旅人は、わけを聞くと「村までようたしに

いった帰りに、とつぜんおなかがいたくなっただ」という。

しばらく、ばあさまのせなかをさすった旅人は、小さな体をせおっての、じいさまのまつ家まで送りどけたそうな。

じいさまとばあさまは、たいそうかんしゃしての、しばらくとまっていくようにといったんだと。

旅人はいそぐこともない、あてのない旅だったから、とまることにしたんだと。

そして、たいくつしのぎに、畑をたがやし、田の草取りを手つだって、じいさまにも、ばあさまにも気に入られてすごすうちに、秋のしゅうかくのころになってしまったんだと。

こうして、いっしょにくらすうちに、こが

34

らしが吹く冬がやってきたんだ。

その年は、たいそう寒い日が続いて、じいさまもばあさまも元気がなく、かぜをこじらせて、二人ともあいついでなくなってしまった。

じいさまとばあさまは、しぬまぎわに旅人（たびびと）にこういったんだと。

「私たちがなくなっても、どうか、この家でいつまでもくらししてくれ」とね。

旅人は、そういわれたものの、じいさまもばあさまもない家にすみ続けるのは気がひけたんだ。

しかし、村人も「じいさまもばあさまもそう話していたんだから、ここにすみつづけるとよい」と、よい言葉をいつてくれたんだ。

それで、旅人はこの村にすむことにしたんだと。

ところがある日のこと、旅人はくらの中をのぞいてびっくりしたんだ。くらのすみの古びたつぼの中には、お金がびっしり入っていた。

そのとき旅人は、すぐにな、この村に最初にきたときのことを思い出したんだと。

「自分が働いてもらったものでないものは、自分で使っちゃいけない」と。

そう思った旅人は、このお金を村のために使ったんだ。

こまった人がいれば、かしてあげ、道を作るためや、川のつつみをなおすために使ったんだと。

それからというもの旅人は、村のものからかんしゃされ、二位殿（にいどの）とよばれるようになったんだと。

35

しかし、つぼのお金がなくなったある日、村人にはなにもつげずに旅に出た。道すがら「今あるのは、あの河童（かっぱ）のいたずらのおかげ」と、河童にかんしゃしての、沼のほとりで少しだけたたずんで、この村を後にしたようだったと。

もうそのころには年おいていた、あのときの河童はな、その話をじまんげに、なんども、なんども、まごの河童に話してすごしたんだと。

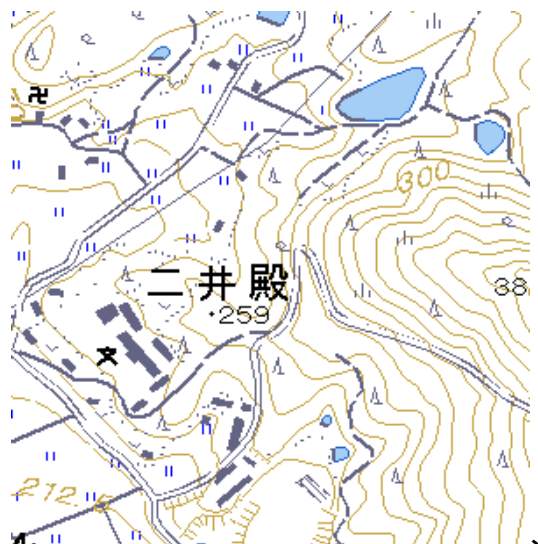
その河童が、木の葉をまいたあたりは、「捨金（すてがね）」、旅人がすまいしたあたりは、「二位殿（にいどの）」とよばれているそうな。

*二位：功績のあったものにあたえる位階（くらい）のひとつ。一位から八位まである。



広島県三次市布野町横谷捨金（すてがね）
1/25,000 地形図浜田3号の3「櫃田」

36



広島県三次市布野町上布野二井殿（にいどの）
1/25,000 地形図浜田3号の4「土布野」

9. 美味しい鍵穴

（おいしいかぎあな）

静岡県静岡市鍵穴・桑木穴・香木穴



東の国から、この駿河（するが）の山里にひとりの男がやってきた。

男は、東国（とうごく）では、仕事がう

37

まくいかなかったので、ここまでくれば、それがかんたんにできるだろうと、やってきたんだと。

その男の仕事はな、どろぼうだった。

お金のありそうな家をさがしては、母屋（おもや）や蔵（くら）にしのびこんで、金めのものをぬすむんだ。

まぬけなどろぼうは、東国では家人に気づかれ、かい犬においかけられしては、にげ出していたんだと。

それで、いつもひもじい思いをしていたんだそうなの。

のんびりしたこの村なら、男にも仕事がうまくできそうだった。

目ぼしい家はないかと思わしながら、だんだん畑にかこまれた小さな村を歩いている

38

んどこそは、あのうまそうなものを手に入れようとしたんだ。

用心しながら、においのする方へ向かったんだと。するとここでも、においのかぎをかけた蔵（くら）の中から流れてくるようだった。

蔵にしまうほどの、大切なものなのだろうか。

かぎあなに、はなをよせてみると、「うーん、なんともよいにおいだ。きっと、おいしいものにちがいない。こんどこそ！」

どろぼうは、かぎあなから中をのぞいてみたが、それらしきものはない。

それでも、なんとかして食べ物を手に入れたいとひっしになってかぎを開けようとしたんだと。

39

と、どこからかいいにおいがしてきた。

「いいにおいだな、うーん、おいしそうなにおいだな」

おなかをすかした男は、においにさそわれて、とある大きな家の前に近づいた。

戸はかたーくしめられていたんだが、小さな”かぎあな”から、そのにおいはもれてきた。穴に目をつけて中をのぞいても、おいしそうなものは見えなかった。

それどころか、においにつられて、うろろうしているうちに、ここでもかい犬においかけられたんだと。

おなかをすかした男はな、やっとの思いで犬からにげた。

そしてまた、目ぼしい家はないかなあと歩いていると、またあのにおいがしてきた。こ

小えだで、さぐってみたがうまくいかない、ゆびを入れてなんとかならないかとやってみたがうまくいかない。

それどころか、入れたゆびが、かぎあなからぬけなくなってしまった。

「うーん、こまった。ぬけないぞ」

そのうち家の人が出てきたんだと。

「なんをしているだ！！」

「かんべんしてけれ、おなかがすいてとおりがかったところで、おいしそうなにおいがしたので、ちょこっとあじ見しようとして、ゆびをつっこんだんだ。そしたら、ぬけなくなったんだ」

と、どろぼうは、まじめに答えた。

「わっはっは」

「ははは」

「はっ、はっは！」

知らないうちに、じいさまも、ばあさまも、よめごも、子どもも、みんなが蔵の前さ集まってきて、大声でわらうんだと。

「ゆびつつこまなくても、はなよせればわかるだろう」

どろぼうには、なんのことか、わからなかった。

（みなさんは、どうしてだか、わかったかな。）

おなかをすかしたどろぼうのゆびは、おしても、引いてもぬけなかった。

蔵（くら）の戸をこわすのが一番だが、この村のお百姓さんには、いのちのつぎにだいじなものが、入っているだから、かんたんにこわすわけにはいかない。

ともかく、わらいをこらえながらも、かぎ

40

あなに、ゆびつつこんだままのどろぼうに、めし食わせたんだと。

あわてて、ごはんをのみこもうとして、むねがつかえたどろぼうは、その時こういったんだ。

「のどが一、つまったので、水を一ぱいくれないかーの」

「あいよ、いまお茶を持ってきてあげるから待ってろ」よめごは、母屋（おもや）に茶をとりに行った。

「かぎあなのどろぼうさん、お茶をどうぞ」

「おー、おいしいお茶だー。あーそうか、このにおいだ」

どろぼうは、気がついた。

「わっはっは」

「ははは」

「はっ、はっは！」

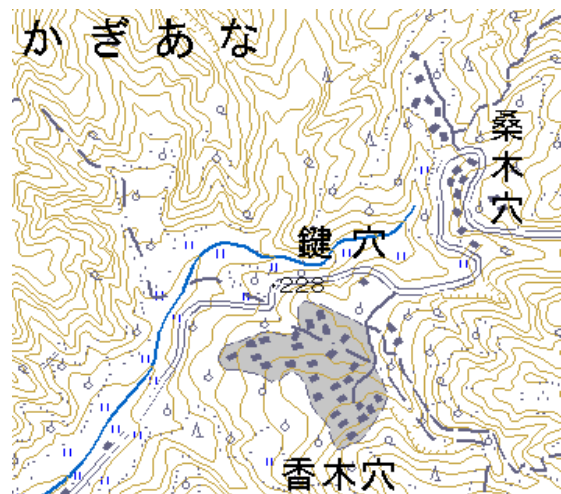
「ゆびで、茶のあじみなんぞできるもんかね」

だんなも、じいさまも、ばあさまも、よめごも、こどもも、そしてどろぼうまでも大わらい。

そのひょうしに、どろぼうのゆびは、すっぽんと、ぬけたんだと。

くらの中には、駿河名産（するがめいさん）のお茶が、それはそれは、だいじに入れられていたんだ。

この話が、いまにつたえられたからでしょうかね、このあたりのことを「かぎあな（かぎあな）」とか「香木穴（かぎあな）とよぶんだそうな。



静岡県静岡市鍵穴（かぎあな）、桑木穴（くわぎあな）、香木穴（かぎあな）

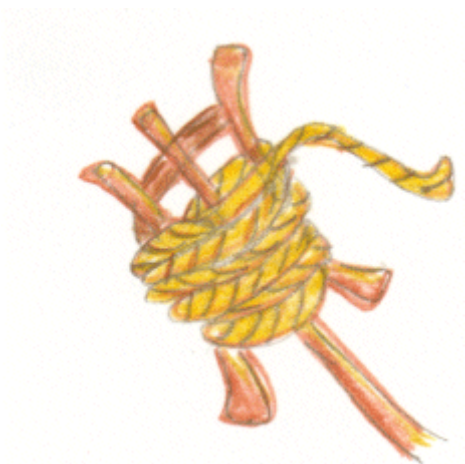
1/25,000 地形図静岡6号の3「蒲原」

41

10. 国で二番の滝がいい

(くにでにばんのたきがいい)

福井県小浜市須縄・奥田縄・口田縄



この国の中ほどに、”須(す)”、“奥田(おくた)”、“口田(くちだ)”という三つの村があつての、それぞれ村にはじまんの大滝(おおたき)があつたんだ。

それぞれの村は、「われの村の滝が、国で一番だ」といってじまんしていたんだと。

”須“の村のものがいうには、「われの村の滝は、水もおおくで高さが三丈二尺(3じょう2しゃく:9メートル60センチほど)もあるだ」。

“おく田”の村のものがいうには、「いや、われの村の滝は、はばも広く高さが三丈二尺もあるだ。」

そうしたら、“口田”のものも、「われの村の滝は、高さが三丈二尺もあつての、まわりのけしきはさいこうだ」。

というように、自分の村の滝が国一番だと

42

いってゆずらなんだ。

まわりの村のものは、それぞれすきにいわせておけばよいと、相手にしなかったんだが。

それぞれの村のものは、ほかの村のものは、うそをいっているといつてな、なっとくしなかった。

そして、「なんとか、おさばきを！おねがいます」と、お役所(やくしょ)にうったえたんだと。

お役所も、あまりのねっしんさにまけてな、「それでは、滝の大きさをはかってみるか」ということになったんだと。

お役人が立ちあつての、滝”をはかってみた。

ところが、いずれの滝も、三丈二尺(3じょう2しゃく)でぴったりおなじだったんだ

と。

「これで、どの滝も、いずれおとらぬ国一番の高さということだな」と、お役人がいったんだと。

ところが、まだなっとくがいかない”奥田“の村の名主(なぬし)さんは、お役人にこういって、はかりなおしてくれと、たのんだんだと。

「この前はかった“縄”は、目もりがまちがっていたように思う。おらの村の“奥田縄”ではかりなおしてほしい」とね。

それを聞いた、ほかの村の名主さんも、同じように「そうだ、おらの村の、”須縄“ではかりなおしてほしい」。口田の名主も、つい「おらの村の“口田縄”ではかりなおしてほしい」といってしまったんだと。

43

役人は、知らぬ顔をして、こういったそうだ。

「それぞれがさし出す“縄”が正しいから、それではかりなおしてほしいというのだな。わかった、わかった。」

「ぜひ、お願いします」とそれぞれの名主はいったんだと。

さっそく、村むらでは、“縄”を作った。
そして、それぞれの滝を、それぞれの“縄”ではかったんだと。その結果はというと、
”須の滝” 三丈四尺、
“口田の滝” 三丈五尺、
“奥田の滝” 三丈三尺
となって、“口田の滝”が国一番ということになったんだと。

これで、“須”と“奥田”の村も、しぶしぶ

44

なっとくして農作業にはげんだそうな。

ところが、秋のしゅうかくになると、お役人がやってきて、正しいというそれぞれの“縄”で、田をはかりなおし始めた。

須村の田は“須縄”で、
おく田村の田は“奥田縄”で、
口田村の田は“口田縄”での。

それが、どうしたかって。

お役人の“縄”より、長いけっかがでる“縄”を使ってはかりなおした田は、それぞれ、いつもの年より広くなった。

その分だけ、いつもの年より多くの“ねんぐ”を取られることになったんだと。

もちろん、口田の村は、滝も一番なら、“ねんぐ”も一番になってしまった。

こまった名主さんは、お役人に頭を下げて、

おねがいしたんだと。

「滝は二番でもいいです。“ねんぐ”が国一番だけは、かんべんしてください」とね。

お役人は大へんおこってな、それぞれの名主さんに、おきゅうをすえたんだと。

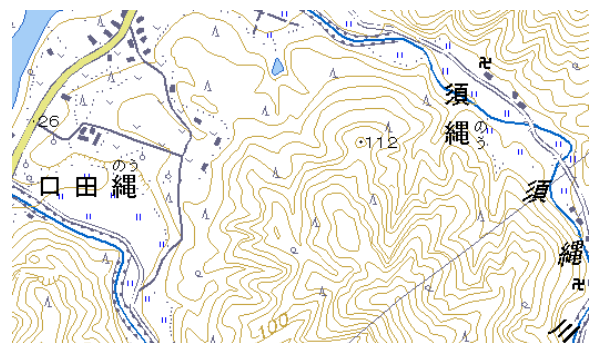
「自分たちのつごうのいいように、そのときどきにかってなことをいってはいけない」とね。

それからというもの、田はお役所の“縄”ではかって“ねんぐ”をとることにしたんだと。

それからだろうね、ここの村は、須縄（すのう）、奥田縄（おくたのう）、口田縄（くちたのう）とよばれるようになったそうな。

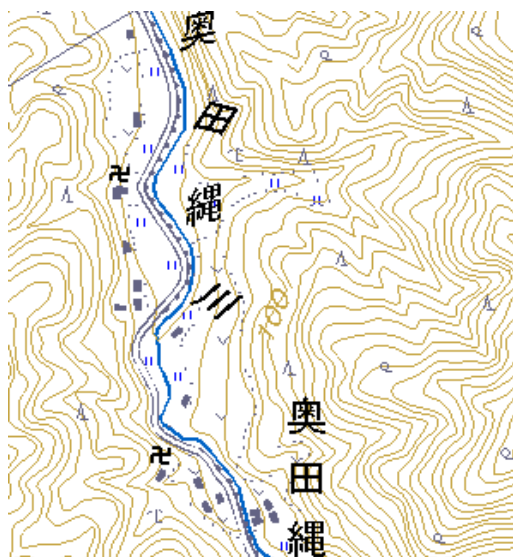
*むかし、測量に使うものさしは、“縄”で、できていたときもあった。

45



福井県小浜市須縄（すのう）口田縄（くちたのう）

1/25000 地形図：宮津 8 号の 1「小浜」



福井県小浜市、奥田縄（おくたのう）
1/25000 地形図：宮津 8 号の 1「小浜」

46



発行日：2006 年 5 月
著 者：やまおか みつはる
発行所：オフィス 地図豆
定価（税込み） 500 円（477+税）

「オフィス 地図豆」
（店主 やまおか みつはる）
〒300-1237 茨城県牛久市田宮 2-18-3
tel：029-830-7511
<http://www5a.biglobe.ne.jp/~kaempfer/>
Copyright 2008 オフィス地図豆

47